

「読める」とはどういうことか

読むとは、声を出すということよりも、その働きは、「意味をくみ取る」ことにあります。たとえば、声に出して読ませますとへたですが、よく文意を理解できる子どもがいる半面、いわゆる読み方はうまいが、いっこうに文意の読み取れない子どもがいます。わたしたちは、もちろん、後者よりも前者に価値を認めています。

しかし、外見だけでは、意味を読み取っているかどうかは、わかりません。そこで、やむなく、耳に聞いてわかる声だけを手がかりにして、すらすら読めれば、「よく読めた」と考え、つかえつかえ読むと、「よく読めない」と、考えるわけです。事實は、かならずしもそうではないのですが、そう考えるよりしかたがないわけです。

ところが、人は、うっかりすると、目的の意味よりも、手段の声のほうをだいに考えるようになるのです。つまり、うまく声に出していえれば、「うまく読めた」と、ほんとうに考えてしまうのです。

かながやさしい、というのは、こういう考えから起こってきているのです。「とも、えんぼうよりきたる。またたのしからずや」これが、声に出していえさえすれば、それで読めたと思っている人は、単純な頭の

人といわざるをえません。

かな書きの「源氏物語」はやさしいか

論より証拠、かな書きの「源氏物語」や、漢字が一つも使われていない「土佐日記」は、けっしてやさしくなどありません。それどころか、漢字に改めさえすれば、もっとずっとわかりよくなる、と思われることばがたくさんあります。

かながやさしいというのは、五十音を学べば、どんな文でも読める、と誤解しているからです。まったくあさはかな考えといわざるをえません。こういう人は、おそらく、ローマ字を学べば、英語やフランス語が、読めたり、書けたりできる、と考えるのではないのでしょうか。ローマ字がどんなによく読めても書けても、英語やフランス語が、読めたり、書けたりできるようにはなりません。漢字は、読めて書ければ、国語も読めたり、書いたりできるようになるのです。同じ字という名がつくとはいえ、働きはまったくちがっていることを、はっきりと認識しなければいけません。